

ネパール地震の被災地を訪ねて

南 真木人 民博 研究戦略センター



仮設住居に泊まりました

写真：カトマンズで JICA 専門家と情報交換。(右から2 番目が筆者)

フィールドに出たならば、どこで寝るのかということも、現地のやりかたに順応し「日常」のものとなっていく。しかし、それが被災地の仮の住まいであればどうであろうか。

山地の村へ

ネパール地震が発生して約二カ月後の六月と七月、遅きに失した感はあるが、被災状況と現状を見るためにネパールに行ってきた。行くにはできるだけ支援の手が届きにくい山地の村を、特に社会的弱者の置かれた状況を見たかった。そこで、もと不可触カースト(ダリット)の被災者を救援してきたフェミニスト・ダリット・オーガニゼーション(FEDO)というNGOをまずは訪ねた。FEDO職員はころよく救援先の村々の情報とコンタクトすべき人物の連絡先を教えてくれ、そのひとつシンドウパルチョーク郡バタセ行政村のピカダーダに行くことができた。

ピカダーダは六三戸の鍛冶師カーストと五戸の仕立師カーストからなる村だ。ジープで行けるジャルビレから南西に歩いて登ること一時間半、尾根の上に村はあった。泊まるころも食事も手配できるから来てくたさいと電話でいわれ、用意したテントも三〇キロの米も持たずに、というより持たずに、小雨の中を歩いた。ジャルビレまでのパレフィ川沿いの村々の倒壊状態から予想はしていたが、目の前に広がる瓦礫の山にことばを失くした。全六八戸が跡形もなく全壊しており、瓦礫の整理も未だ手つかずのところが多いのだ。壁材であった石が掘り起こされている窪みは、二人の犠牲者を救出しようとした跡だという。

波形鋼板の住まいで

仮設住居は尾根筋から少し下ったトウモロコシ畑に並んでいた。当初はいわゆるブルーシートで小屋掛けしていたが、雨風に耐えず、今はシートも利用しつつ壁と屋根を波形鋼板で覆っている。波形鋼板は一枚五キロあ



泊めてもらった仮設住居。バクタブルに住む二男が携帯電話でアレンジしてくれた

★
ネパール・シンドウパルチョーク郡



狭い畑に仮設住居が並ぶ。キリスト教徒もいて仮設教会も再建されていた



ピカダーダの尾根筋。2階建ての住居が並んでいたという



丸めた波形鋼材をひとり2枚運ぶ。雨季に入り仮設住居の補修が急ピッチ

る重厚なもので、ペラペラのトタン板とは似て非なるものだ。村には政府から各戸一万五〇〇〇ルピー(約一万八〇〇〇円)の給付金が既に支給されており、それで一枚約二〇〇〇円の波形鋼板を買いそろえた人が多い。給付金が二カ月以内に支給されたことは幸いだった。だが、支給が遅れているダディン郡のある地域では、国際NGOが波形鋼板二枚を無償で配布し、それが不要な家には現金一万ルピーを支給していた。そうすると、後日支給される給付金は波形鋼板に費やさなくて済むという不公平が生じるが、他の郡のことなど誰も知る由がない。

食糧や毛布などの救援物資はFEDO以外からは届いていない。そうだ。特別の配慮が求められるダリットの村があることを理由に、近隣村の非ダリットの人びとが救援物資を要求し入手しているらしいが、それがこのダリットの人たちにまで届くことはないという。カーストや民族を超えた平等な助け合いが見られたのは震災後一週間だけだった、という語りは誇張とはいきれない面がある。仮設住居では土間に持参のマットをひき寝袋に入って寝た。疲れも手伝って熟睡できたが、これが毎日続く生活とはどのようなものだろう。お礼を包んだとはいえ、こうした状況下、わたしたちを泊めてくれた村人の好意に応えることは個人ではなかなか難しい。救われたのは、後日、同行したネパール人の友人が事務長をつとめる医療NGOが、ピカダーダの学校再建のため支援に乗り出してくれることになったことだ。

これまでわたしは仮店舗や仮小屋など波形鋼板を用いた建物に泊まったことがあったし、「ことさら悲惨な印象をもっていない。それは今も変わらないのだが、今回の仮設住居での一夜は、自らの無力さと災害研究の難しさを痛感させられるものとなった。